

(1)小説と詩歌

第一高等学校時代に加藤は学内の『校友会雑誌』や『向陵時報』に、映画評、演劇評、そして小説や詩歌を投稿していた。『崖』、『山の樹』、『しらゆふ』といった同人誌にも寄稿したことはすでに述べた。この頃に投稿していた作品にはどんなものがあるか。小説や詩歌、映画評、演劇評がほとんどであり、日本の社会や政治を直接的に論じる評論文はなかったわけではないが、その数は少ない。

『校友会雑誌』には小説のみ3点を発表、『向陵時報』は卒業までに16回寄稿しているが、ひとつの例外を除いて、小説・詩歌、映画評、演劇評であった。ひとつの例外とは、のちに述べる「戦争と文学とに関する断想」である。同人誌に発表したのは詩歌と翻譯詩と文学評論である。

加藤が一高時代に採りはじめた冊からなる『青春ノート』でも事情はあまり変わらない。『青春ノート』は1937(昭和12)年末あたりから書きはじめたと推測できるが、1938(昭和13)年までの加藤の関心は、政治に強く向かっていたわけではなく、主として文学に、それも小説や詩歌に向かっていた。「ノートⅠ」から「ノートⅢ」までは、そのほとんどが1938年に綴られているが、その3冊のノートに書かれるのは、小説や詩歌が中心である。

戦争と触れあうのは「石川達三『生きてゐる兵隊』覚書」(1938年3月)という書評と「インテリ」(1938年7月8日)寸評くらいである。「インテリ」には次のように書かれる。

この国の言論が今日程「インテリ」を尊重したことはない。何故なら今日程「インテリ」の攻撃されたことはないからである。

また

「インテリ」は評判に反して（傍線部傍点）戦場では勇敢だそうである。しかし「インテリ」が嘗て評判に反しなかったためしはない。何故ならインテリジェンスとは評判に反すること正にそのことだからである。

芥川の『侏儒の言葉』を思いおこさせるこの文章は、のちの加藤の文章を彷彿させるものがあるが、他の多くの文章は必ずしもそうとはいえない。反時代的な言説をノートに記すための加藤自身の機がまだ十分には熟していなかったということだろうか。